書くこと、それは闘うこと

WRITIN' IS FIGHTIN'

イシュメール・リード

松溪裕子＝訳

書くこと、それは闘うこと

WRITIN' IS FIGHTIN'

イシュメール・リード
松溪裕子＝訳

中央公論社

WRITIN' IS FIGHTIN'
by Ishmael Reed
Copyright © 1988 by Ishmael Reed
Japanese translation rights arranged with
Ishmael Reed, c/o Lowenstein Associates Inc., New York
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo
Japanese edition © 1998 by Chuokoron-Sha, Inc.

書(か)くこと、それは闘(たたか)うこと

著　者　イシュメール・リード
訳　者　松溪裕子(まつたにゆうこ)

1998年7月10日初版印刷
1998年7月20日初版発行

発行者　笠松　巌
発行所　中央公論社
〒104-8320
東京都中央区京橋2-8-7
電話　販売部 03-3563-1431
編集部 03-3563-3666
振替　00120-4-34
本文印刷　三晃印刷
カバー・扉印刷　大熊整美堂
製本　小泉製本

Printed in Japan ©1998 CHUOKORON-SHA, Inc.
ISBN4-12-002807-0 C0098
・定価はカバーに表示してあります。
・落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

書くこと、それは闘うこと✤目次

紙上ボクシング 三七年後 7
わたしのオークランド そこにあるもの 15
第一部 15
第二部 31
アメリカ 多人種社会 53
三〇〇年にわたる「一九八四年」 61
同じ血筋 違う二人 82
チャンピオン 93
対立はどちらの側に？ 98

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

騙すか 騙されるか 108
アフロ・アメリカ文学におけるシリアス・コメディの伝統 119
スティーヴン・スピルバーグの「ハワード・ビーチ」 128
オーガスト・ウィルソン 伝統の担い手としての劇作家 146
アメリカの人種的束縛 174
単一文化主義者の中のショインカ 188
ラドクリフ・ヤードの夜 197
訳者あとがき 205

装画・装幀　渋川育由

書くこと、それは闘うこと

Writin' Is Fightin'

「立派に闘い抜いた」
ジョン・O・キレンズ、ジェイムズ・ボールドウィン、
アレン・カッツマンに捧ぐ

紙上ボクシング 三七年後

Boxing on Paper : Thirty-Seven Years Later

一九五三年、わたしはニューヨーク州バッファロー、ウィリアム・ストリートにあるドラッグ・ストアで働いていた。ある晩、家に帰ろうとしていると、一台の車が歩道に近づいてきて止まり、中の男が「新聞配達の手伝いを探しているのだが」と言った。男の肌よりわずかに濃い茶色の古ぼけたパッカードの後部座席には、新聞が山のように積まれていた。男はA・J・スミザーマンといい、バッファローの新聞 *The Empire Star Weekly* の編集長だった。新聞をすべてのスタンドに配り終えると、「この仕事を毎週やらないかね？」とたずねられた。その頃すでに、わたしはものを書きはじめていた。初めて仕事を頼まれたのは、一九五二年だったが、それは母からの依頼で、勤め先であるフィルモアのサトラーズ・デパートの同僚のために誕生日の詩を書いてくれ、というものであった。

少年時代、公営住宅団地（プロジェクト）に住んでいたわたしは、イーグル・ストリートにある古いアフロ・アメリカン・エピスコパル・ザイオン・チャーチ、聖ルカ教会の日曜学校で説教のまねごとをするといったこともやっていた。*The Empire Star* での仕事のおかげで、メアリー・クロスビーやスミザーマン、彼の息子トゥーサンといったきちんとした考えをもつ黒人と知り合えるようになった。一年も経たないうちにコラムを書いてみないかとさえ言われ、わたしはジャズのことを書いたが、やがてこれは後の辛口の文章スタイルにつながっていった。

高校生になると、*Star* からは次第に遠ざかるようになった。というのも他に考えるところがあり、スミザーマンが払える以上の金が必要になったからだ。スミザーマンは融通のきかない人物で、毎週新聞を発行するだけでやっとという状態だった。そのスミザーマンが死んだとき、逆境に抗して闘い続けた人物、と *The Buffalo Evening News* は記した。優しく、知的な編集者であり詩人でもあったこの人を想うとき、まず心に浮かぶのは、苦難に直面した際の彼の冷静さだった。

その後もまためぐり合わせだろうか？　大学を中退し、いつのまにか父親となり、タルバート・モール・プロジェクトに住んで週給四〇ドルで家族を養おうとしていた一九六〇年、わたしは *Star* のためにすすんで仕事をひき受けた。当時の編集長はジョー・ウォーカーといい、精力的で戦闘的な若者だった。彼は、差別教育と闘い、ブラック・パワー闘争を支持して、街に波紋を投げかけていた。わたしにとっては、このときこそ自分の文章スタイルが試されたの

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

だった。タルバート・モールの住民のために信号機を設置させるための闘争（それは今もまだそこに設置されている）、差別教育についてのジェイムズ・グリフィス市長との論争、警察にひどい扱いをされた黒人売春婦の弁護などを書きつつ、同時に詩や脚本も書いた。そのうち、*Star* は倒産してしまった。

アイルランド系アメリカ人で、デヴィッド・シャープという詩人がわたしの脚本を気に入ってくれ、ある週末、シャープといっしょにニューヨークへ行くことになった。わたしたちは、ヴィレッジのベドフォード・ストリートにあるレストラン「チャムレーズ」で大半の時間を過ごした。わたしは感動したものである。壁には、ここへ出入りしていた作家の著書のカバーが飾られており、エドナ・セイント・ヴィンセント・ミレーも含まれていた。その後何年も経って、わたしの本も仲間入りさせてもらい、ようやくここまで来たのだと感慨深かった。ある脚本家は、カウンターのそばに立ってわたしの脚本を読み（これはその後、廃車した車とともに消えてしまったのだが）、気に入ってくれた。

このとき以来どうしてもニューヨークへ行きたい気持ちがつのり、数週間後、デーヴとわたしはグレイハウンド・バスに乗っていた。身のまわりの品をすべてコインランドリーで買った一〇セントの青いビニール袋に入れていたのだが、気恥ずかしいわたしの気持ちを察してくれたデーヴは代わりに荷物をもってくれたりした。一九六二年のことである。

ニューヨークでは、アンブラ・ワークショップに参加した。アミリ・バラカが、ブラック・

アーツ・レパートリー・スクールに大きな影響を与えた黒人美学の原型がここにある、とした所である。わたしはこのワークショップを通じて、アフロ・アメリカ文学のスタイル上のテクニックを知るようになった。

一九六五年には、ニュー・ジャージーのニューアークで新聞を発行し、*Star* に書いていたのと同じような問題を取り上げた。たとえば、生活保護を受けている母親がふさわしい髪型をしていないという理由で、一部の黒人が怒っているという問題。また、警察についての記事を書いたのも、*Advance* の編集者をしていたときのことだ。激しい非難を浴びていた警察が、自分たちの活動をモニターさせる手段として、パトロールに同行するようコミュニティのメンバーに声をかけたことがあった。地元の公民権運動の代表者たちはこれを拒否したが、わたしは公正を期すために、ある土曜日の夜いっしょについてまわってみた。そして、それが大変な仕事だというコメントをしたために、一部の黒人インテリ層からは右翼と呼ばれたりした。

賛成か反対かという二極化した社会にあっては、わたしは政治や社会問題に対して、わかりきった、あるいは予言めいた、コンピュータで処理するようなアプローチを行なうつもりはない。人生ははるかに複雑なものだ。黒人同士の犯罪に関するかつてのわたしの記事は左翼から非難されたし、「左翼」的大義に対する共感については右翼から非難された。しかし、左も右も、その狂信性においては価値ある違いなどないように思えるときがある。

哲学的懐疑主義というのはある程度必要だとわたしは思っている。左翼、右翼、中道、いず

れからも批判を受けつつ、それでもなお書くためのフットワークが衰えない限り、ペンによるジャブを数多く出し続けることが大事なのではないだろうか。ぬくぬくした、ヤッピー全盛の時代であっても、闘うに値する問題は存在している。それは新鮮な見方を必要とする問題なのだ。

批評家のメル・ワトキンスが、わたしの文章スタイルをモハメッド・アリのボクシング・スタイルと比較してくれたのは大いにうれしいことだった。三冊目の小説、*Mumbo Jumbo*『マンボ・ジャンボ』を出したときには、友人だった故リチャード・ブローティガンが、一九一〇年七月四日の *San Francisco Daily* の一面に掲載された、ジャック・ジョンソンがジム・ジェフリーズに勝った記事を引用して褒めてくれたことがある。これも非常に光栄なことだった。もしわたしが自分のスタイルをボクサーの誰かにたとえるとするなら、ラリー・ホームズといったところだろうか。わたしは婉曲な言いまわしはしないし、手心を加えるようなこともない。これまではときにロー・ブローもあったが、最近はだんだんとねらいが定まり、パンチは常にウエストラインより上に届くようになってきた。わたしはマイク・マッカラムのようなボディ・スナッチャーではなく、たいてい顔面をねらうのだ。

黒人ボクサーのキャリアは、黒人の男のキャリアそのものである。毎日がジムにいるようなものであり、黒人男性を恐れと魅惑の対象として見るアメリカにおいては、黒人男性は無礼さと敵意に直面せねばならず、それは非人間的な相手とスパーリングするのと同じことなのだ。

わたしにとって、こうした考え方になじむのは簡単なことではなく、昔は非常に当惑したものだが、最近になってようやく少しわかってきたことがある。つまり、自分と異なる背景をもつ人間を理解するには大きな努力を要するということ、しかもそれが自分の人生にとってなくてもすむものとなればなおさらだ。だからこそ、まるで黒人男性は「絶滅の危機に瀕する種」のリストに載せられているように思える昨今、なぜ一部の読者や論争相手が私の拠って立つ所を正しく見てくれないかも理解できる。

一九四〇年代のある日、ニューヨークの新聞では、ヨーロッパの強制収容所へユダヤ人が移送される記事が最後のほうに載っており、一方で天気のことは一面に載っていた。実際、その日は非常に暑く、きっと誰もが海へ行くことを考えていたのだろう。当時のアメリカ社会は封建時代にも似て、金持ちと貧乏人の間の収入差が広がり、ダウンタウンの開発業者はコンクリートと鉄の空虚なモニュメントを建設して、作家やアーティスト、貧乏人などを追い出し、その周辺地区ではドラッグにやられた連中がうろつくこととなった（警官たちは総出で、ブラジリアの街のようなダウンタウンを見張っていたからだ）。そんな中、海辺へ行って肌を焼こうかという人がたくさんいるということらしい。肌を焼くことで、メディアやいわゆる「教育」システム、文化的指導者らが軽蔑するようにと教えた人間の皮膚に近づこうとでもいうかのように（黒人が恐怖と魅惑の対象であると言ったのは、こういう意味である）。ロックンロールなど、一般に広まっているアフロ・アメリカ的なるものも、「日焼けの文化的形態」の一種と

見ることができるだろう。

そこでわたしは、ラリー・ホームズのようにプロフェッショナルでいられる限り、つまり、書くというのがどういうことであるかわかっている限り、いつまでも問題を提起し続けるつもりである。ホームレスのために発言する一方で、同時に、偉大な作家ジェイムズ・ボールドウィンが行なった、わたしには不当と思える告発に反対してアトランタの中流階級指導者層の弁護もする（作家としての彼とは無関係だ）。場合によれば超人的努力を必要とし、また骨が折れる仕事を続けていくうちに、より謙虚になっていけたらと思っている。

わたしは運がよかったと思う。黒人男性作家としてこれだけ長くやってこられたのはほとんど奇跡といってもよい。「トークン」と見る人々がいるかもしれないし、また、黒人の才能など稀にしかないと装うことでもろいエゴを守ろうとする批評家もいる。だが、そんなことがあるとしても、黒人の才能が豊かであることはわたしにはよくわかっている。ここ数年、仲間がたくさんの文章を書いているのを知っているし、読んでもきた。実際、故ライト・フラーが次のように言ったのは正しかった。イシュメール・リードの本が一冊出る陰で、ゲットーなどにいる何十人もの才能ある作家のものが出版されずにいる、と。これだけ長く続けているうちに、業界のマネージャーの言葉を信じつつ死んでいった多くの「トークン」の悲しい例もたくさん目にした。誰もが自分は個性的で、人とは違うと心から信じていたのだ。

チャンピオンとの試合に向けたウォームアップのつもりで無名のボクサーと闘ったところが、

その「名もない」相手に叩きのめされてしまった自信満々のボクサーたちの気持ち。この世界では、番狂わせは日常茶飯事である。

イラン・コントラゲート公聴会で、ジョージ・シュルツ国務長官が、世界のどこにでも賢い人間はいるのだ、という発言をしているのを聞いてビックリした。これは、わが国のいわゆる文化的指導者、そして西洋文明の「教育的」擁護者らに欠けている認識だ。もちろん、わたしにはよくわかっている。おんぼろトレーラーの中で、刑務所で、キッチン・テーブルで、皿洗いの合間に、夜勤の休憩時間に、あるいは期末試験の間をぬってものを書いている人々が国中にいることをよく知っているのだ。疲れ切った人、一文無し、幻滅させられた人、一〇〇枚目の拒否の知らせを受け取った人、あるいはチャンピオンどころか挑戦することさえむりだと言われて失望している人。この本はそうした人たちすべてのためのものである。書くこと、それは闘うこと。

カリフォルニア州オークランドにて

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook